

北部呉語における中古果・假掇韻母の語音変遷について

平田, 直子
九州大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/13190>

出版情報 : 中国文学論集. 36, pp.1-11, 2007-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

北部呉語における中古果・假撮韻母の語音変遷について

平田直子

0. はじめに

本稿は、古呉語の音声・音韻を知ることのできる歴史文献資料を用いて、中古音から現代呉方音を形成する過程を明らかにする研究の一部分を成すもので、ここでは中古16撰の中から果撮・假撮二撰をとりあげて論じようとするものである。すなわち中古時代の果・假撮韻母は、現代までの発展の間に何がどのように変化したのか、その変化はいつごろどういう時代的順序で行われたのかを、北方官話の語音変遷と比較しつつ、通時的観点から考察しようというものである。

本稿で用いる宋代以降の歴史語音資料は、先行研究により呉方音、特に北部呉語に依拠したものと認められている。ゆえに北部呉語に焦点を当て、果・假撮韻母の語音変遷の過程とその特徴について論じることとする。

1. 語音資料の解説と時代区分について

使用した資料の年代と、依拠した方音を下表1に掲げる。そして、1.1からは、表1の各資料について、その解説を行った。

表1

年代	歴史語音資料および現代方言資料	依拠した方音
13世紀 (宋末元初)	鎌倉唐音資料 小叢林略清規 金光明懺法 諸回向清規式 梵清本正法眼蔵 韻書『聚分韻略』 『賓退録』射字詩の音韻体系	浙江北部音 南宋中心地域の讀書音
16世紀	『日本国考略・寄語略』(1523年) 『日本風土記』(1592年) 『同文備考』(1540年)	寧波 呉語地域 昆山

北部呉語における中古果・假撰韻母の語音変遷について

年 代	歴史語音資料および現代方言資料	依拠した方音
18世紀	『古今韻表新編』(1720年) 『荊音韻匯』(1792年前後)	寧波 宜興
19世紀中 ～20世紀初	<i>Ningpo Syllabary</i> (寧波音節便覽) (1901年) 『現代呉語的研究』(1928年)	寧波 呉語
現代音	寧波音 蘇州音 紹興音 天台音 杭州音	寧波 蘇州 紹興 天台 杭州

1.1 13世紀の資料 (鎌倉唐音 禪宗系資料)

鎌倉唐音の禪宗系資料は、13世紀の浙江北部の音に基づいて形成されたものと考えられており、その字音が宋末元初の呉方音(浙江北部音)を母胎としているということは、国語学においてはすでに定説となっている⁽¹⁾。

ゆえに、唐音は呉方音史を研究する上で、貴重な資料になりうるといえる。以下に言語資料及び本稿で参照した先行研究を挙げる。

小叢林略清規：沼本克明 1997 『日本漢字音の歴史的研究』所収「第4章宋音・唐音統合分紐分韻表」。

金光明懺法：沼本克明 1997 『日本漢字音の歴史的研究』所収「第4章宋音・唐音統合分紐分韻表」。

諸回向清規式：奥村三雄 1956 「漢字音の体系」『訓点語訓点資料』第6輯 pp.11～42。

梵清本正法眼蔵：水野弥穂子 1968 「梵清本正法眼蔵に見える唐音表記について」『駒澤大学文学部研究紀要』第26号。

西崎亨 1995 「金沢文庫本『正法眼蔵』の唐音」『武庫川文庫』46号 pp.109～122。

聚分韻略：奥村三雄 1973 『聚分韻略の研究 付古本四種影印慶長版総索引』風間書房

『賓退録』射字詩の音韻：将邑剣平 1995 「『賓退録』射字詩の音韻的研究」『東方学』第89輯。

13世紀は如上の鎌倉唐音 ～ を中心とするが、この他に、同時代に中国で著された『賓退録』の射字詩が反映する音韻体系(南宋の中心である江蘇・

浙江のある地域で行われていた)は、当時の呉方言の読書音体系を知る上でも重要である。『賓退録』の射字詩の音韻については将邑1995を参照し、上記の唐音資料と合わせて、総合的に13世紀の音価を推定する。

1.2 16世紀の資料

14世紀から16世紀にかけては、従来日本語の史的研究を試みる際に用いられてきた、いわゆる中国語資料を活用した。ここでもまず言語資料と参照した先行論文を掲げる。

『日本国考略』：中野美代子 1964 「日本寄語による16世紀定海音系の推定」『東方学』28輯。

大友 信一 1968 『室町時代の国語音声の研究』至文堂。

谷 峰夫 1987 「『日本寄語』音韻研究のために」『海上保安大学校報告』第33巻第2号。

丁 鋒 2004 「『日本考略・寄語略』反映的16世紀呉語音韻」『海外事情研究』(熊本学園大学海外事情研究所)第32巻第1巻 pp.197~211。

『日本風土記』：大友 信一 1968 『室町時代の国語音声の研究』至文堂。

木津 祐子 1998 「『日本風土記』の基礎音系」『国語国文』第57巻第12号 pp.1~44。

丁 鋒 2006 「『日本風土記』所記日語対音反映的十六世紀呉語音韻」中国語言学会第13届学术年会発表稿。

『同文備考』：丁 鋒 2001 『「同文備考」音系』中国書店。

上記の諸文献が扱った中国語音は関連する先行研究などにより、おおむね呉方言であると結論づけられている。呉方言といってもむろん地域的の差異による語音変種も現れる可能性があるが、総じて一つの呉方言(北部呉語)という共通した音韻体系を反映しているとみてよいと考える。これらの中国語資料は、日本語の史的研究において用いられるだけでなく、14世紀から16世紀という期間の呉方言を究明するにあたって価値ある資料といえる⁽²⁾。

注意を要するのは、中国資料を扱う場合には解読という作業が必要であるということである。解読とは音注漢字がどんな日本語音に対応するのかということ(この場合、日本語音も標準音か、方言音かも含めて)、中国語の語彙が日本語のどんな語彙に相当するものであるかを第一の手がかりとして、音注漢字を注音者の方言に近似した音で読む必要があるということである⁽³⁾。

そして、その音注漢字から注音者の方音体系を探り、北部呉方音史における位置づけを行わなければならない。これまで日本語学の研究に主として用いられてきた中国語資料を呉方音の史的研究に利用することは、従来の研究では解決できなかった明清時代の呉方音の音声・音韻の究明に大いに役立つであろうと期待される。いわゆる中国語資料が中国語の語音史研究に貢献できるということについては、丁鋒1998に詳しく論じられているのでそれを参照されたい⁽⁴⁾。

中国資料は用例が十分でない場合があり、例字不足を補うため、同時代に中国で刊行された韻書『同文備考』を参照し、16世紀の呉方音の音価を考えたい。

1.3 18世紀の資料

『古今韻表新編』：平田 2005 『『古今韻表新編』音系』『呉語研究』上海教育出版社。

『荊音韻匯』：耿振生 1993 「十八世紀的荊溪方音——介紹『荊音韻匯』」『語言学論叢』第18輯、商務印書館。

18世紀の文献資料としては、上記の2種の韻書がある。『古今韻表新編』は一種の同音字表である。筆者は平田2005において同書の字音の整理と分析を行い、この同音字表が反映する音韻体系は、著者の出身地である呉語寧波音との共通性が強いことを明らかにした。一方、耿振生1993によると『荊音韻匯』からは、18世紀の宜興の音韻体系を知ることができる。

1.4 19世紀後半から20世紀初頭の語音資料

The Ningpo Syllabary (寧波方言便覧) : P.G von Möllendorff, Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 1901.

『現代呉語的研究』：趙元任 清華学校研究院叢書第四種；大華院書館 1968重印

1.5 現代の語音資料

寧波音：高志佩・辛創・楊開 1990 「寧波方言同音字匯」『寧波大学学报』第4巻第1期。

蘇州音：北京大学中国語言文学系 1989 『漢語方言字匯』第2版、文字改革出版社。

紹興音：陶寰 1996 「方言」『紹興市志』巻43 浙江人民出版社。

天台音：戴昭銘 2003 『天台方言初探』 中国社会科学出版社。

杭州音：錢乃栄 1992 『当代呉語研究』 上海教育出版社。

現代方音資料を除いた歴史語音資料は、主として寧波音に依拠したと推定されるのものが多く、その音韻変遷の考察も、主として寧波音を中心に行った。むろん資料の中にはそれ以外の呉方音を反映するものもあるが、概して北部呉語内部の方音差異は小さいため、各時代の資料に反映された言語音の音韻変遷をたどることは、すなわち北部呉語の音韻変遷をたどることと同一視してもよいのではないかと考える。

語音資料の解説は上記の通りである。以下において、果・假摂韻母における中古音からの変遷をたどる試みを記述していく。

2. 果摂韻母

2.1 中古果摂における韻目とその音価⁽⁵⁾

	1等	2等	3等	4等
開口	歌 [a]	—	戈 [ɪa]	—
合口	戈 [ua]	—	戈 [ɪua]	—

中古音では、果摂は歌開1・戈開3・戈合1・戈合3の4つの韻母を含む(平声をもって上去声を兼ねる)。

上表のごとく果摂の主母音の音価については、一般的に後舌の[a]が推定される。これに対し、次節の假摂の主母音は前舌[a]であることから、両摂の違いは主母音が前寄りか、後寄りかという点にのみあることになる。北方官話では、中古音後期から宋代(とくに南宋時代)にかけて果摂は次第に円唇化の傾向を強め⁽⁶⁾、その主母音は[a] > [ɔ] > [o]に変化したと考えられている⁽⁷⁾。

では、北部呉語における変遷はどのようなものであったであろうか。2.2より、その語音変遷をたどっていくことにする。本稿では、便宜上呉方音史の時代区分を「7～10世紀(中古音)」、「13世紀」、「16世紀」、「18世紀」、「19世紀末」、「現代」の6つに設定している。これは、単に表1で掲げたごとく、依拠した歴史語音資料の刊行年代によって設定したものにならず、何らかの音韻変化の特徴によって時代区分をしたということではないことをあらかじめ断っておく。

2.2 果摂の音韻変遷

<歌韻> 開口 1 等

7世紀	13世紀	16世紀	18世紀	19世紀末	現代
[a]	— [ɔ あるいは o]	— [o]	— [o]	— [o]	— [əu] 寧波・蘇州
					[ou] 杭州・天台
					[o] 紹興

果摂の中古音から近代音へと移る過渡的な状況は、13世紀の呉方音を反映しているとされる鎌倉唐音においても見ることができる。唐音（本稿では断らない限り唐音の名称は、鎌倉唐音を指す）より以前の字音層である日本漢音においては歌韻開口 1 等韻はア韻[a]であったが、唐音では一律にオ韻[o]（例字：「那、羅、作、我」）であらわれている。これは、漢音と唐音との差異を表す特徴のひとつである。時代的にも唐音は、中国語語音史の流れと合致する。ゆえに、唐音が扱った言語音である呉方音においても、この時期、北方標準音と同様の変化が起こっていたといえることができる。

ただ、唐音とほぼ同時代の北方官話の源流ともいわれる『中原音韻』では、円唇化の過程で端、泥、精組において複韻母[uo]（例字：「多、羅、左」）となり、[u]介音を生起させ、その結果合口戈韻と合流している。唐音においては u 介音が存した表記は見えないため、おそらく介音は成立していなかったと考えられる。ここに、北方音との相違点が見られる。16世紀『同文備考』、18世紀『古今韻表新編』（以下『新編』と略称）、19世紀末『The Ningpo Syllabary』（以下、『Syllabary』と略称）、現代紹興音は、すべて[o]であられる。この[o]からのさらなる発展を現代北部呉語の各地点で見ることができる。

ところで、北部呉語の多くの地点では、端組の「大、拖、他、那」などの一部の字は文白異読を有し、白話音[o]に対し、文語音は中古時代の低母音を保って[a]や[a]があらわれる。唐音の禅宗系資料である『諸回向正規』では、「阿」に[a/o]の二つの音が見える。『金光明懺法』でも「佗」に[a]の読みがある。『日本国考略・寄語略』（以下、『寄語略』と略称）においても「阿」に[a/o]、「大、他」に[a]。また、『Syllabary』においても同様の発音が見える。『中原音韻』でもこれらの字は[a]で読まれ、その他の果摂字が[o][uo]であるのに対して例外的な発音となっている。

北方官話と北部呉語とで共通するこの文白異読の現象については、官話系の音系で起こった例外的音韻変化が北部呉語においても同様に起きたと見るべきか、あるいは北部呉語がある時代から官話の影響を受けた結果と見るべきか、という二つの推測が可能であると考えられる。

2.3 < 戈韻 > 開口 3 等、見組 「茄・伽」

7世紀	13世紀	16世紀	18世紀	19世紀末	現代
[ia]	[a, ia, ɔ 或 o]	[ie]	[o, yɔ, y]	[yɔ] ⁽⁸⁾	[ia]寧波・天台 杭州・紹興 [io文/ɔ]蘇州

戈韻開口 3 等韻は所属字が少なく、唐韻の禪宗系資料にはこれらの字は見えない。『聚分音略』において「茄」には[a][ia][o]の3つの音が収録されている。『聚分音略』では、漢字の右側に漢音が、漢字の左側に唐音が注されることが原則となっている。よって漢字の右側の[a][ia]の音は漢音、左側に注される[o]は唐音ということになる。これは18世紀『新編』の[o]に対応するものと考えられるが、その後この音は現代に至っては収録されておらず不明になっている。『新編』では他に「茄」[yɔ][y]がある。『同文備考』では、「茄」が[-ie]、「伽」には[-ie/-ia]、『寄語略』では「茄、伽」は収録されていない。19世紀『Syllabary』では「茄」は[yɔ]だが、伽は[ia]で発音が異なる。「茄」字は20世紀初頭までは、1等韻と同じように主母音を円唇化させるような変化があったかもしれない。ただ現代音では低母音の[a][ia]などに発音されることが主流となっている。

2.4 < 戈韻 > 合口 1 等

7世紀	13世紀	16世紀	18世紀	19世紀末	現代
[ua]	[ɔ あるいは o]	[o]	[o]	[o]	— [əu]寧波、[o]紹興 [u(唇音)/əu(その他)]蘇州 [ou]杭州、[o/u]天台

唐音では匣母字は中古時代の u 介音を保っているが、その他の字は[o]で現れる。つまり、匣母字以外は合口介音を反映しておらず、歌韻 1 等韻と同音になっているということである。おそらく当時の北部呉語においては介音の弱くないしは消失が起こっていたものと考えられる。『寄語略』、『同文備考』、『新編』でも[o]で現れる。

2.5 < 戈韻 > 合口 3 等、「靴」

7世紀	13世紀	16世紀	18世紀	19世紀末	現代
[iua]		[ye]	[yɔ]	[y]	[y]寧波・紹興・天台 [yɥ]杭州 [io]蘇州

官話系方言では「靴・癩」は中古音から現代音までに[iua] > [iue] > [ye]

のように主母音は前舌を保ちながら、舌位を上昇させていったのに対し、北部呉語では主母音は後舌を保ち上昇していった。『Syllabary』以降は主母音よりも介音が強まり主母音を吸収し単韻母[y]となった。現代の多くの地点では「癩」の音は収録されていない。天台では、「癩」[yo]は「靴」[y]とは区別されている。

3. 假摂韻母

假摂の韻母とその音価は以下の通りである。

	1等	2等	3等	4等
開口	—	麻[a]	麻[ia]	—
合口	—	麻[ua]	—	—

仮摂は麻韻一つだけからなり、開口合口あわせて3つの韻母を含む。

中古音から『中原音韻』を経由し現代標準語音まで、主母音[a]は音価の変動がほとんどなかった⁽⁹⁾。

3.1 <麻韻> 開口2等

7世紀	13世紀	16世紀	18世紀	19世紀末	現代
[a]	[a]	[a][ua]	[a][ua]	[ɔ]	[o]天台・寧波・蘇州 [a]杭州

唐音、『寄語略』でも、日本語の[-a]をあらわすのにもっぱら開口2等韻字が使われている。『同文備考』、『新編』では、幫組は合口扱いとなっているため、合口韻の[ua]の音価があらわれる。中古音以降、麻韻開口2等韻は[a] > [a] > [ɔ] > [o]と主母音が円唇化していったが、歌韻開口1等韻とは合流することなく、常に歌韻1等韻の前段階の音韻状態を維持し、区別を保ちながら共に変化していった。

3.2 <麻韻> 開口2等、見曉影組の文語音

7世紀	13世紀	16世紀	18世紀	19世紀末	現代
[a]	[ia]	[ia]		[yo]	[ia/yo]寧波、[ia/io]紹興 [ia]天台、[ia]杭州、[io]蘇州

麻韻開口2等韻は、官話系では、後に見曉影組声母の後ろで介音[i]を誘発し、[a] > [ia]となる。唐音の禪宗系資料では、少数字ながら『金光明懺法』「迦」字に[ia]、『小叢林略清規』「家、迦」字に[-ia]、『諸回向清規』「又」

字に[-ia]などがi介音を生起した形で現れており、宋末元初の呉方言においても官話系の影響かと思われる例字を見つけることができる。16世紀『寄語略』では「下、牙」が口蓋化したヤ「ja」の音を記すのに使用されている。また丁鋒2001に拠ると、『同文備考』では、全体として55%の所属字がi介音を生起している一方で45%がまだ生起していない状況ではあるが、麻韻のみでいえば、70%の字がi介音を生起しているということである。また介音は現れてはいるものの、声母は口蓋化していないということである⁽¹⁰⁾。この後18世紀頃には、丁鋒2001でも「呉語的見系聲母舌面化現象到清中葉以後繼續開始有文獻反映」と指摘されるように、『荆音韻匯』には、本格的に口蓋化された状況が反映されている。ところが同時代の『新編』では麻韻開口2等韻にi介音をもった韻母は現われず、文語音のみを収録しているようである。寧波では、見系字の口蓋化は蘇州や宜興などの江蘇省南部の北部呉語に比べ、浸透が緩やかであったと見るべきだということであろう。しかし、その寧波音も、次の『Syllabary』や現代音では、各[yɔ][yo]で現れている。これは寧波音でも、やや遅れて官話の影響として入って来た[ia](或いは[iɑ])が、見系声母以外の麻韻開口2等韻と変化の軌を同じくし、主母音を円唇化させていった結果であるといえる。

ところで寧波や紹興では文語音[iɔ]以外にもうひとつ別の[ia]の音が現れる。これは新しく他方言から入ってきた層の文語音かと思われる。早期に受け入れた官話系の[iɔ]に対し、新層の文語音[ia]という構造で、現代音においては、数種類の読みとなつてあらわれている。

また、麻韻開口2等韻が[a] > [ia]([iɔ])となつても、麻韻3等韻[ia]とは依然区別されている。

3.3 <麻韻>開口3等、精組、喻母、日母白話音

7世紀 13世紀 16世紀 18世紀 19世紀末 現代

[ia] [ia]⁽¹¹⁾ [ia] [ia] [ia/iɛ] [ia]寧波、[ia/iɛ]紹興

[a/i]天台、[ia]杭州、[iɔ]蘇州

麻韻開口3等韻は、『中原音韻』では、すでに[iɛ]となつて、中古麻韻開口2等見系字に由来する家麻韻と区別され、車遮韻として独立した韻部となっている。

浙江北部音では中古音[ia]は標準音のように[iɛ]とはならず、現代までその音価にほとんど変動がなかった。『寄語略』では、3等韻はヤ[ja]、リヤ[rja]の対音に当てられている。『新編』、現代音においても低母音[ia]をそのまま保っている。

3.4 <麻韻> 開口3等、章組、日母文語音

7世紀 13世紀 16世紀 18世紀 19世紀末 現代

[ɪa] [ia] [ie] [ɥɔ] [ɔ/æ] [o]寧波・天台
[o/e]紹興、[ɥeɪ]杭州
[o/ɤ]蘇州

『中原音韻』では、章組、日母は声母が舌葉音化し、韻母も[e]になっている。北部呉語では章組声母が舌面音であるときまでは、3.3の精組や喻母の韻母と変化の軌を同じくしていたが、後に声母が舌葉音化してくると、舌葉音声母のもつ円唇性が韻母にも影響して主母音は[ɔ]となった。このため、独自の変化を遂げることになり、精組や喻母とは袂を分かった。『新編』では章組字は撮口呼の扱いとなっている。『Syllabary』ではさらに発展し介音が脱落した。

3.5 <麻韻> 合口2等

7世紀 13世紀 16世紀 18世紀 19世紀末 現代

[ua] [ua/a] [ua] [ua] [uɔ] [o]寧波、[uo]紹興
[ua/uo]天台、[ua]杭州
[o]蘇州(その他)[ɔ](莊組)

官話系においては、中古の[ua]は現在まで保たれる。『同文備考』では[ua]。「華」に[o/uo]の又音がある。現代の寧波音では、介音が消失して母音は後舌のoとなっている。

4. まとめ

本稿では、果・假摂韻母の北部呉語における語音変遷をたどることと並行して、その過程を北方官話音史と比較しながら、類似点、相違点について論述してきた。

ところで北部呉語の特徴の一つに単母音が多いことがあげられる。これは中古の二重母音や -n、-m を有した韻母が時代の流れと共に単純化した結果ということであるが、この単母音化という大きな変化と、果・假摂韻母の語音変遷とは、その音系内部において深い関係を有していると想像される。今後は果・假摂韻母以外の摂における語音変遷も同様の研究方法で進めていく予定であるが、単に文献上に現れる語音変遷を推測するにとどまらず、その方言内部における発音変化のメカニズムといった点をも明らかにしていくことを目指したい。

注

- (1) 有坂 1939、高松 1993、湯沢 1988 などを参照。
 - (2) 14世紀には『書史会要』があるが、ここでは例字が極めて少数という理由で用いていない。
 - (3) 大友 1968 参照。
 - (4) 丁鋒 1998 「日漢対音資料及其価値」『言語研究』 pp.381-396
 - (5) 平山久雄 1967 を参照。
 - (6) 李範文 1994 を参照。
 - (7) 佐藤 2002 を参照。
 - (8) [ien]の音も見え、現代寧波音[ian]に対応するものと考えられる。
 - (9) 佐藤 2002 を参照。
 - (10) 丁鋒 2001 参照。
- (11) 唐音では、中原音韻で区別されるところの家麻韻と車遮韻は区別せず同音に扱っているが後の資料では両者はやはり区別されていることから、やはり唐音の拠った浙江北部音でもきちんと区別されていたであろう。

参考文献

- 有坂秀世 1939 「諷経の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」『国語音韻史の研究』所収 三省堂 pp.185～220。
- 佐藤昭 2002 『中国語語音史 中古音から現代音まで』白帝社。
- 高松政雄 1993 「中世唐音」『日本漢字音論考』風間書房 pp.172～192。
- 丁鋒 2006 『日中・琉中对音資料による中国音韻史の総合的研究』第一分冊（上巻：著述篇）平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 「日漢対音資料及其価値」『言語研究』 pp.381-396
- 平山久雄 1967 「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 1・言語』 pp.112-116。
- 湯沢質幸 1988 『唐音の研究』勉誠社。
- 羅濟立 2005 『客家語と日本漢字音、鎌倉宋音の比較対照研究 —— 閩南語文語音、浙江呉語との関わりをめぐる』致良出版社（台湾）。
- 李範文 1994 『宋代西北方音』中国社会科学出版社。

本稿は、2005年中国の蘇州大学で開催された全国方言学第13届年会暨漢語方言国際學術研討会において口頭発表したものに、加筆修正を加えたものである。